

日本語はカテゴリーⅣの言語——その割には日本人学習者は英語が良くできる。コンテキスト、SPEAKING、interaction, intelligibility,

英語を話せるようになるための土台は文法、先立つものは語彙、そして基礎体力は読むことで身につける、という学習方法を前書『本物の英語力』で説明しました。

米国国務省 Foreign Service Institute (FSI) 言語取得の集中訓練。

カテゴリーⅣ：『超困難な言語』『英語母語話者には極めて難しい言語』(“Super-hard languages which are exceptionally difficult for native English speakers)

アラビア語、中国語（広東語と北京語）、日本語、韓国語の四言語。目標達成までに八八週間（二二〇〇授業時間）。

この分類表は更新されることもあり、すべての言語が入っているわけではありませんが、「日本語」は常に最難関の言語に分類されています。

立場を逆に変えてみれば、私たち日本人が英語をある程度使えるようになるには、八八週間集中的に特訓しなければならないということです。朝から晩までガンガン英語を特訓して約一年半です。その上に半年くらいは留学した方が良いとさえ推奨されているのです。それほど英語と日本語とは言語文化的に距離があるのです。それなのに日本の学校では一〇年間で二カ月くらいしか英語を学習していないのです。もちろん集中的な特訓などやっていません。その割には日本人学習者は英語が良くできるなあ、と感心するほどです。

どういう状況で、どのような相手に対し

て、どういう意図でなされている発話なのかというコンテキストを瞬時に総合的に理解することは人間でしかできないことでしょう。大量のデータを記憶することでは人工智能にかないませんが、コンテキストを汲みとって相手の発言の意図を掴むことは人間が勝るはずで、だからこそ自動通訳機が登場しても重要な場では人間の通訳者が欠かせないのだと思います。

そのように特定の言語が話されているところを観察する際に、どうしても陥りがちなのは、自分の文化を中心に解釈し（自文化中心主義）、自分が抱いているコミュニケーション観に基づいて判断してしまうことです。それを戒めて、前述したハイムズは、異なる文化におけるコミュニケーションを理解する上で役に立つ枠組みを提案しました。頭文字をとって **SPEAKING** として知られ、次の八つの要素からなります。

場 (Setting/Scene : コミュニケーションが生起している場)、参加者 (Participants : コミュニケーションに参加している人々)、目的 (Ends : コミュニケーションが行われる目的)、行為連鎖

(Act sequence : 特定の会話の前後を含めて起こる一連のコミュニケーション)、調子 (Key・ふざけているのか深刻なのかなど)、メディア (Instrumentalities : 音声なのか文字なのか視覚なのかなど)、規範 (Norms : コミュニケーションについての規範)、ジャンル (Genre : 雑談なのか交渉なのか学術発表なのか等々) です。この枠組みは、実際に起きているコミュニケーションを社会文化的な出来事として記述し研究するために考案されたものですが、英語学習者にとって参考になる部分があります。

日本人の英語学習者がよく間違える英単語に、**memorial** があります。辞書を引くと、名詞なら「記念碑」、形容詞なら「記念の」とあるので、誤解してしまうのですが、英語の語感としては、「故人を偲ぶ碑」「追悼の」というニュアンスが強くなります。**memorial park** は単なる記念公園ではなく「戦没者を記念する共同墓地」です。

ところが英語では、世間話とも言えないほどのちょっとした雑談をすることが多く、これを**スモール・トーク**と呼びます。

・・・

閉め切った部屋で一緒になった人に対して **I need some fresh air.**

「新鮮な空気が欲しいよ」と言えば、相手もおそらく **So do I.** などと受けるでしょう。これがスモール・トークで、大した意味がなく、社交辞令というか、その場を共有している誰かとその時だけの人間関係を作るという目的で行われます。

「親バカ」という表現は日本人ならではの謙遜を反映しているのですが、英語母語話者が言った **I'm proud of my daughter.** を「親バカ」と訳したのは、日本語と英語の違いを尊重せず、あえて日本語らしくしてしまう**翻訳方略**をとったわけです。これを翻訳学では、**domestication** (受容化) と呼びます。読む人々にとって分かりやすい翻訳を目指し、**著者を読者の文化に連れてきてしまうような翻訳**です。それに対して、多少の違和感があっても原文を尊重し、読者が著者の文化に出かけていくような**翻訳方法**もあって、こちらは **foreignization** (異質化) と呼ばれます。異文化理解の観点からは、英語のまま忠実に「誇りに思います」の方が長かったのかもしれませんが。

考えてみると英語には、褒め言葉に使う単語や語句が豊富で、ちょっとした機会があると気前よく使います。もらったプレゼントを開けて褒める時も、**beautiful/gorgeous/marvelous/terrific/fantastic** 等々、形容詞が豊富です。日本語に訳すと、「きれい」「すてき」くらいに収まってしまい、**英語の褒め言葉を日本語に訳す時に苦勞する**くらいです。

日本人の中にはプレゼントを開けもせず、**Thank you.** とだけお礼を言って、すぐにしまってしまう人もいて、がっかりする外国の人がいます。最近、その場で開けてみる日本人も多いように思いますが、**頂いた贈り物を贈り主の目の前で開けたりしない、**という日本の**伝統的な礼儀**を守っている地域や個人は存在します。もちろん英語圏でも、**May I**

Open it? 「開けてみて良いですか?」と聞いて、Of course. Go ahead. 「もちろん、どうぞ」と承諾を得てから包みを開けるのですが、その後が違います。プレゼントを取り出して確認して、Oh, it's unbelievable! This is exactly what I wanted!! 「うわあ、信じられない! ちょうどこういうのが欲しかったのよ!!」などと、**言葉を尽くして喜びを表現**します。そのような文化から来た人々にとっては、日本人のお礼がそっけなく感じられることになりましたが、これは英語力の問題ではなく、文化の問題になってきます。

では、どうするかといえば、英語を話している時には英語文化に沿うのが一案です。

あまり断定的に言いたくない時には、I assume…/

It seems to me that…と和らげる表現があります。「私の考えでは」と**自分の意見であることを強調**したければ、In my opinion, …/In my view, …/As far as I'm concerned, …などの言い方で主張を始めても良いでしょう。自信を持って相手を説得したかったら、Believe me, this is effective, because…などと言えます。

その大野先生によれば、**言語能力とは「豊かな語彙を持ち、事実をしっかりと見て、そのときどきにぴたっとあう表現ができる」**ことです。『日本語の教室』(岩波新書)の中では、こうも語っています。

「もちろん、美しい日本語も大事です。しかし現在の日本にとって大切なのは、そうした感受に傾いた日本語の使い方ではなくて、正確な日本語、的確な日本語、文意の明瞭に分る日本語を日本人一般がもっともっと心掛けるべきだということです」

幕末から明治へかけての我が国が、西欧近代文明を取り入れるため、幕府の蕃書調所を中心として、西欧諸国の書籍を片っ端から翻訳し、日本に存在しない事物や概念であっても**訳語を作り上げた**ことにより、日本人は日本語という母語で多様な分野について学ぶことが可能になりました。それが現代のノーベル賞受賞へ結びついているとすれば、母語の重要性は今こそ再認識されて長いのではないのでしょうか。

豊かな語彙を持ち、**的確な日本語を使える母語能力は、英語で自らの考えを表現する際に強固な土台**となり強力な支えになるはずです。英語学習における母語の意義は、もっと真剣に考えられるべきでしょう。

「個人攻撃的な発言」は、英語で personal remarks、「個人攻撃をする」は **get personal** と言い、転じて「険悪になる」ことを意味します。

主張は明確にしながら、言い方を和らげるには、**間接的な反論** (indirect disagreement) があります。よく使われるのは、Well…/In my opinion, …/Actually…などで始める方法です。やんわりと「これから私が言うことは、今のあなたの意見に反対の主張です」と予告することになり、相手は心の準備ができます。

以下はほんの一例ですが、丁寧度の低い依頼文から高い依頼文まで列挙してあります。

(1) Please write a letter of recommendation for me.

「推薦状、書いて下さい」

(2) Would you please write a letter of recommendation for me?

「推薦状を書いて下さいますか？」

(3) I wonder if you could write a letter of recommendation for me.

「推薦状を書いていただけないでしょうか」

(4) I'd appreciate it very much if you would write a letter of recommendation for me.

「推薦状を書いていただけたら大変有り難いのですが」

(5) I would appreciate it very much indeed if you would be so kind as to write a letter of recommendation for me. 「よろしければ推薦状を書いていただくお願いができたら本当に有り難いと存じます」

二〇一六年六月にオバマ大統領が現職のアメリカ大統領として初めて広島を訪問した際には、「謝罪をしない」ことが事前に明らかにされました。広島・長崎への原爆投下によって日本が降伏したことで多数の人命が救われたと信じているアメリカ国民が多いという、国内的な状況を反映してのものであります。当初の予定よりは長いスピーチとなり、日本では概ね好意的に受け止められたと言えるでしょうが、「アメリカが原爆を投下した」とは言わず、"Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed."という婉曲な表現に物足りないものを感じた被爆者がいたのは当然でしょう。

・・・

原爆という「死」は、広島に「落ちた」のか「降った」のか「降りた」のか。

どういう日本語を選ぶと、原爆を投下された側の思いが滲み出るか、いや、そのような感情は交えずに、アメリカ大統領の意図に沿い原文に忠実に訳すべきか、という判断を翻訳者はしなければなりません。

リスニングについてのおすすめは、開き直すことです。リスニングは相手があることだから難しく当たり前、努力が正当に報われないのは仕方ない、と割り切るので。そして、前向きに対策を考えるのです。

リスニング方略として考えられるのは、三つあります。

(1) 完璧主義を捨てる

(2) 背景知識と想像力を駆使して先を読む

(3) 「あなたは何を言ったのですか？」と相手に聞く

・・・

単語が一つ分からなかったことが気にな

って次に集中できず挫折するのは完璧主義のせいです。なんか知らない単語があったけど、ま、いいや、次にかけて、大体の意味がざっくり分かればいいんだ、くらいの大胆

さに切り替えましょう。

...

大事なのは、内容を表す「内容語」(**content words**) ですので、こちらは強く発音します。耳に入ってくるはずです。

もっとも、その肝心の内容語がたまたま知らない単語だったり、聞き取れなかったりするかもしれません。それでも慌てないことです。本当に大切なことは繰り返して言うことで強調するのが話し言葉の特徴ですので、言い方を変えて同じ内容が再び登場するかもしれないと、次を待てば良いのです。

...

もちろん、このためには周到な準備が必要で、当たるも八卦、一か八かで無謀な先読みをするわけではありません。通訳する場合には、どのような目的で、いかなる場でコミュニケーションが行われるのか、参加者はどういう人か、ということを含めて背景知識を蓄えて本番に臨むからこそ、発言者の意図を汲みつつ、先読みができるのです。

...

話されている内容についての背景知識を活性化

し、こういう場なのだからこういうことを言ってるのかな、と常識や想像力をフル稼働させて、およその意味を推測するのです。当たらずとも遠からず、で切り抜けていくのです。

実際の社会での対話では、分からないことは相手に聞く、が原則ですし、マナーでもあります。

単語どころか、いったい何を言ったのか掴めなかった場合は、

What do you mean?

Will you please explain it to me a little more in detail?

分かりもしないのに、やたら I see. 「分かった」と返事していると、とんでもない泥沼に落ち込みかねないので、無理せず妥協せず分かったふりをせず、何度でも聞き返しましょう。それが、やりとり (**interaction**) の真髄です。

そもそも「沈黙」に慣れている日本人に比べて、欧米の人々は会話に現れる「沈黙」を嫌うことが多いので、沈黙が登場すると急いで何かしゃべることになり、やりとりは一方的になりがちです。

これを避ける方策は、黙らないことです。だって、英語で何か言おうとして考えてるんだけど? と言われそうですが、何か言おうとして黙って考えるのではなく、考えているプロセスを口にしてしまえば、沈黙は防げます。

口にすることは何でも構いません。Let's see... 「そうですねえ……」、Well, let me think... 「うーん、どうかなあ……」、What should I say... 「何て言ったらいいだろう……」等々。要するに時間稼ぎなので、Hummm\Um... など無意味な音でも、何も言わないよりマシです。

この照れ笑いに似た、不思議な笑いと言外の人たちに映るのが、他人に身内の不幸を話す時に日本人が浮かべることのある笑顔です。「自分の父親が亡くなった、という話をしたのに、彼は笑っていたんだ。どういう親子関係だったんだろうとショックだったけど、関係が悪いわけではないらしい。一体全体、何で彼は笑ったんだ？」と英国人から聞かれたことがありました。悲しくないわけではないけれど、その感情を顔に出してしまうと、相手に負担感を与えてしまい、お悔やみを言ったり慰めたりしなければならないので、もう大丈夫ですよ、というつもりで笑顔だったんじゃないかしら、と答えたのを覚えています。この種の笑顔については、そんな時に笑わないだろう、という日本人もいるでしょうから、個人差や地域差もありそうです。

ちなみに「自虐ネタの冗談」は、英語で **self-deprecating joke** ですが、self-deprecating は、自分を過小評価し、極度に謙遜している、卑下している様子を表しています。deprecate という動詞には「非難する」という意味の他に「過小評価する」という意味があり、deprecating oneself で「卑下する」「謙遜する」となります。

就職活動の時に「キャリア」ってよく聞くけど、英語ではどういう意味？ と調べてみると、「何らかの専門性を持ち生涯を通して続ける仕事」だと分かります。career diplomat なら「職業外交官」、つまり外交を職業にしている人です。企業だとどうなるのかと探してみると、**career track** という言葉が出てきます。幹部候補だから昇進するコースのようで、どうやらこれが「総合職」のことらしい。・

**by no means** は「決して～ではない」「全く～でない」という強い否定の表現で、This is by no means a boring film. 「絶対、つまらない映画じゃないよ」のように使います。似たような英語には、not at all/in no way/not in the least/not in the slightest/on no account/under no circumstances などがあります。

push myself 「懸命に努力する、頑張る」

「沈黙は金」「そこま  
で言ったら身も蓋もない」「言わぬが花」「言わずもがな」「目は口ほどにものを言う」  
等々、しゃべり過ぎることを戒める格言はいくつも思いつきますが、沈黙を戒める格言や  
話すことを奨励する格言は、なかなか思いつきません。

intelligibility 「分かりやすさ」

ポケモン GO を可能にしている **AR (Augmented Reality 拡張現実)** という技術は、スマートフォンなどの情報機器を使って現実空間を映し出し、そこにコンピューターグラフィックスなどの映像や画像を合成するものです。

「拡張現実」を英語では、**augmented reality** と言いますが、なぜ **augmented** という単語が使われているのか不可解でした。**augment** という英語の意味は、「(価値や数量、効果などを) 増大させる、高める」で、あまりピンとこなかったのですが、現実の世界にコンピューターによる情報を付加することで、現実を広げ、価値を高めるといった意味のようです。ちなみに、「仮想現実」(**Virtual Reality**) は、現実にはないものをコンピューターによって、あたかもそこにあるかのように知覚させる技術のことで、**AR** は現実に存在するものに対してコンピューターが情報を付与し、さらに強く深い知覚を可能にすることです。